

たどたどしい日本語が江戸川区立東葛西中の部屋に響く。平日午前。1年生の男子生徒が中国人向けの日本語教科書を使って勉強していた。教えていたのは在日中国人の田芳(29)。「日本語教え隊」の一員だ。生徒は山西省から9月に来日したばかりで、父親は銀座の料理店に勤める刀削麵職人。「大学に進んでホワイトカラーの仕事をしたい」。それが将来の夢だ。親も子も日本語がわからず、学校と家庭の間の連絡もうまく取れない。それを手助けするのが教え隊で区が指導料を補助している。19人の指導員が5か国語に対応するが、うち11人は中国語だ。

「いい学校へ」親も全力



教え隊として中国人生徒を指導する田さん(奥)。「まず日本の学校のルールに慣れることが大切」

言葉と文化壁乗り越え

「子どもは自分の意思で来日したわけではない。日本語を覚え、日本の文化を理解することが大切」。教え隊代表の山本忠明(66)はそう強調する。

◇

「子育ては大変でした。江東区の侯野(48)は振り返る。中国・桂林から中国人の夫の勤務地、札幌に移り住んだのは1993年。長男は7か月だった。その後、川崎市に転居し、長男は小学校に入学したが、その直前の8か月間、中国の実家に預けていたため日本語を忘れていた。「いい学校に進んでほしい」。そう思っていたある日、中学受験のことを知った。知人の中国人の母親からそのための塾があることを教えられた。長男は小学4年から進学塾に通うようになり、それからは目の回るような日々だった。

当時、派遣社員として勤めていた民間研究所の仕事が終わると、車で長男を塾へ送り、その帰りに次男を幼稚園に迎えに行く。夕飯を済ませ、塾に弁当を届け、自宅に戻って次男を寝か

せ、夜9時半頃に塾へ迎えに行く。塾のない日や週末はピアノ教室やサッカークラブ。いろいろな経験をしてほしい」。その一心だった。

「どの学校を受験するのですか」。塾から聞かれ、「一番いい学校」と答えた。学校の情報を集めたのは、そんなやり取りの後だった。成績の良かった長男は、最難関の筑波大付属駒場中

に合格した。同校の高校3年になった長男(18)は東大を目指している。小学5年の次男(11)も国立中学受験のため塾に通っている。侯も今、教え隊の一員だ。「知っている限りのことを伝えてあげたい」

◇

「日本に来た中国人たちの教育にかける熱意はすさまじい」。山本は感服する。江戸川区教委によると、区内の中国人は増え続けており、区立小中学校に在籍する来日中国人児童生徒は5月現在で245人。この5年間で60人以上増えた。

教え隊の田は「子どもたちの多くは『日本の学校は優しくて好き』と言っている。中国のように厳しく勉強させられないから」と話す。

だが、優しさに不満の親もいる。長男を私立高校に通わせる江東区の会社経営、王冠力(52)もその一人だ。

「日本の公立学校は勉強時間が短く宿題も少ない。これでは競争力のある人材は育たない」(敬称略)